

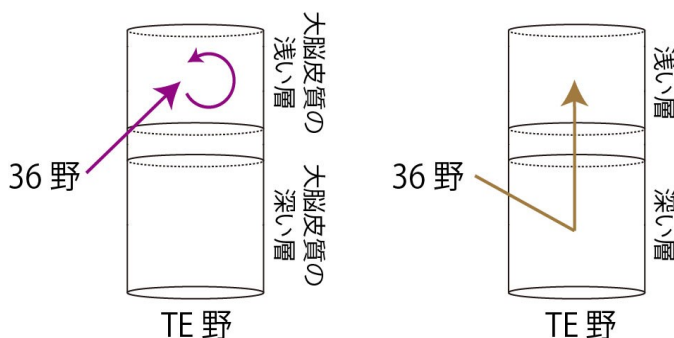
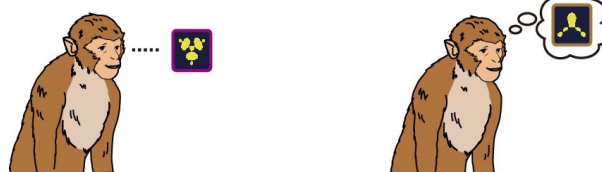
ヒト記憶メカニズムの理解に向けたサル研究

竹田 真己(高知工科大学・
脳コミュニケーション研究センター)

私たちの日常生活は、脳の複雑な働きによって支えられています。では、この脳の働きというのはい体どのようなものなののでしょうか？こうした疑問にアプローチするためには、進化のうえで人間と非常に近いサルを用いて研究を行うことが大変有意義です。

私たちは、目にしたものと関連したものを自身の記憶の中から思い出すことができます。小さい頃のアルバムを見て、当時の出来事などを思い出した経験は多くの方がされていると思います。本発表では、「ものを見て、ものを思い出す」際に、脳領域間や皮質層間といった空間スケールであるメゾスコピックスケールの記憶神経回路がどのように動作するのか調べたサルのご紹介したいと思います。合わせて、私がこれまでどのようにサル研究に携わってきたのか自身の経験をご紹介することで、サルを用いた脳科学研究の魅力をお伝えしたいと思います。

図形を見ている時 → 図形を思い出しているとき



図の説明 脳領域間にまたがる記憶信号の皮質層経路



高知工科大学総合研究所脳コミュニケーション研究センター特任教授。博士(医学)。1999年国際基督教大学卒業、2007年東京大学大学院医学系研究科機能生物学専攻博士課程修了。東京大学医学部助手、助教、特任講師、順天堂大学医学部特任講師、特任准教授を経て、2018年より現職。専門は、神経科学。高次脳機能を実現する神経回路の柔軟性に関心をもつ。2016年度文部科学大臣表彰若手科学者賞受賞。